

きずな
絆を力に一步ずつ

仙台市内の中学校で唯一津波被害のあった高砂中学校。震災の混乱の中、生徒たちはどのように行動し、どのように乗り越えてきたのか、高砂中の先生方に取材した。

1 あの日 あの時

3月11日、高砂中学校では翌日の卒業式に向け、3年生は午前授業で帰宅し、1、2年生は式の準備に追われていました。そして、午後2時46分。突然「ゴゴゴ」と地鳴りがしたかと思うと、激しい揺れに襲われました。生徒たちは地震の揺れに驚き、あちこちで叫び声が上がりました。体育館のガラスが割れ、ものが散乱する中を、生徒たちや教職員は校庭に一時避難をしました。しかし、ラジオで「大津波が来る」との情報が入ったため、近隣のお年寄りや幼稚園の園児らと共に、急いで屋上に避難しました。



水没した校庭

すると、みるみるうちに眼下を流れる七北田川を真っ黒な水が川上へと逆流し始め、約1時間後には仙台港から津波が押し寄せました。校庭は完全に水没し、校舎一階も水に浸かりました。学校に残っていた生徒たちは帰宅できず、そのまま学校で一夜を過ごしました。しかし、教室は避難してきた1500人を越える方々で座るのが精一杯。その日の夕食はクラッカー2枚、ペットボトルが5人に1本など、わずかな食料と水しか口にできませんでした。寒さの中、十分な毛布がないため、カーテンや暗幕、ビニール袋で寒さをしのぐ人もいました。

2 地震後の混乱の中で

仙台港の方角から火柱が上がっているのが見えました。学校の避難所では、お年寄りにジャージやウインドブレーカーを貸したり、浸水のため裸足になってしまった住人に靴を貸したりした生徒もいました。寒さと不安から泣き出す幼い子には寄り添う生徒の姿もありました。



校庭の土砂を運ぶ生徒

一夜明けて、水は引いたものの、校庭はたくさんの土砂と動けなくなった車で埋め尽くされていました。体育館は基礎が破壊され使用できなくなり、今まで見慣れていたはずの風景が一変していました。それでも、生徒たちは校庭に広がったヘドロをかき出したり、支援物資の運搬をしたりと、自分たちにできることを精一杯行いました。避難してきた幼い子と一緒に歌を歌い、絵本の読み聞かせをする姿も見られました。生徒たちは「高中魂」を合い言葉に、みんなで一步ずつ前進していきました。

3 多くの人に支えられて

高砂中学校にはサッカーやスケートなどプロスポーツ選手などをはじめ、日本中、世界中から多くの支援や応援が寄せられました。現在でも多くの方々と交流が続いており、そのひとつが長野県伊那市立東部中学校との交流です。

震災前、高砂中学校の正門に生徒たちを見守ってきた大きな桜の木（ソメイヨシノ）がありました。しかし、震災直後最後の力を振り絞って咲いた後、塩害のため枯れてしまったのです。それを知った東部中学校の生徒会が、伊那市に粘り強く掛け合い、自分の県内でさえ勝手に植樹できない門外不出といわれた天然記念物「タカトオコヒガンザクラ」を高砂中学校に寄贈してくれました。そして、「希望（あかり）」「未来（みち）」と名付けられた桜は、平成25年春、体育館の復旧とともに一輪のつぼみを付けました。



さくらプロジェクト

平成26年には交流の証として兄弟桜が東部中でも植樹され、「輝（ひかり）」「虹（かけはし）」と名付けられました。タカトオコヒガンザクラが復興への「未来（みち）」を照らす「希望（あかり）」となり、東部中学校の桜が、私たちの心の「輝（ひかり）」との「虹（かけはし）」になってほしいという願いが込められています。現在も定期的に交流が続けられ、両校で「さくらの絆」を歌にして語り継いでいく取り組みをしています。

4 今、私たちにできること

高砂中学校では震災を風化させないために、「私たちに何ができるのか」をテーマに、地域への貢献活動や他県の中学校との交流活動などを行っています。そして、支援をいただいた日本中、世界中の方々へ、これからも感謝の気持ちを伝えています。そんな活動の一つ一つが、震災を風化させない取り組みとなると信じているのです。



震災や復興を伝える防災展示室

今、校庭や体育館では、部活動で元気に汗を流す高砂中生の姿が戻ってきました。当たり前前の光景に見えますが、そこには高砂中生が震災を乗り越えてきたからこそその力強さがあります。地域合同の避難訓練では、幼児やお年寄りに手を貸す姿が見られるようになり、「守られる側から、守る側へ」と意識が確実に変わってきています。これからも、高砂中生は、今ここにあることの幸せをかみしめながら、地域の中で中心的な役割を果たしていくことでしょう。